

美濃国竜泰寺所蔵の門参資料について(下)

石川力山

一

本誌前号までに於て、岐阜県関市竜泰寺に所蔵される四種の門参の内、三種の門参、すなわち『仏家一大事夜話』『補陀寺本参為末世記処』『宗門之一大事因縁』について、若干の考察、乃至問題提起をなしてきた。これらはいずれも、洞門抄物の分類の上からは門参の類に相当するものであるが、それぞれが成立的にも、内容的にも、極めて特異なものであった。すなわち、『仏家一大事夜話』は、本来、種々の儀軌に関する口訣である切紙を集大成して一冊にまとめたもので、末尾に「以上十八位当門徒秘参」という記載があることから知られるように、これが竜泰寺室中で門参的扱いを受けて伝承されたことを示している。『補陀寺本参為末世記処』は、竜泰寺と同じ無極慧徹(一三五〇～一四三〇)を開山とする、上野(群馬県)松井田補陀寺に伝承されたもので、もと

もと竜泰寺系の門参ではないが、同じ曹洞下了庵派に於て、臨済宗と全く異なることのない、機関を駆使した公案禅が行われていたことを物語る好資料である。また『宗門之一大事因縁』は、慶長十二年(一六〇七)、竜泰寺十五世中巖文的(一六二二)によって伝受書写された、竜泰寺室中直伝の門参である。そして、従来中世曹洞宗では、臨済宗と殆んど同じ看話禅、公案禅が流行していたといわれるが、『宗門之一大事因縁』の記載によれば、曹洞宗の公案禅援用は、通幻寂靈(一三三二～一三九二)の晩年に始まるもので、それも夜参の行法が発展したものであるとする、注目すべき記載があり、曹洞宗における看話工夫の禅が、果して臨済宗の看話禅そのままの援用かどうかということに対して、新たな問題を投げかけている。

さて、本稿で取り上げた『祥雲山竜泰禅寺門徒秘参』の表題を持つ門参資料は、⁽²⁾『宗門之一大事固縁』と同じく、竜泰

寺十五世中巖文的の伝受書写本で、末尾に、

皆慶長十二白^丁小春吉辰^未

とあり、表紙に「中岩(花押)」の記載もあり、紙質、筆跡い
ずれも同一とみてよい。内容は、下野(栃木県)大中寺系快庵
派の門参、「十則正法眼蔵」に対する花叟派竜泰寺の本参、
「祥雲山竜泰寺句参透り」、「汾陽十八問」に対する仮名抄、
「峨山和尚嗣法之次第」の五篇からなっている。また、「祥
雲山竜泰寺句参透り」の末尾には、

皆慶長十二年^丁南呂拾一日、於竜泰精舎衆寮書了^未

の識語があり、ここまでが慶長十二年八月十一日の書写で、
「汾陽十八門抄」以下、及び『宗門之一大事因縁』が、同年
小春十月の書写であることが知られる。このことは、この年
八月頃から、中巖文的の室内の点検がなされ、十月頃に至っ
て入室嗣法が許されるに至る経過を物語るものではなからう
か。『宗門之一大事因縁』の末尾の識語には、

無極惠徹在判

附与月江正文首座

華叟正壽代々、枝深付与正桃、々々付与正仙、々々付与正芳、
々々付与文的畢、

祥雲山竜泰寺夜参盤之終也

皆慶長十二年小春吉辰

(花押)

とあり、この門参の伝授相承が記されるが、『門徒秘参』は

このような伝授相承を示す記載が見出されないことも、その
ことを暗示しているのではなからうか。

次に、この『門徒秘参』についての若干を考察をなしてお
きたい。

二

まずはじめに、慈明一盆水、紫湖(瘴)狗、雪峯鼈鼻蛇、
趙州分疎不下、瀉山水牯中、趙州布衫、普化鈴鐸の各古則に
対する参話については、次に掲げる参語者をみれば、これが
快庵派大中寺系の門参であることが明らかである。

慈明一盆水 嫌道八紫湖狗、雪峯鼈蛇、黄檗虎声、此ノ四則ヲ
一則ニ引キ入テ、快庵派デハ入頭ノ頭ヲ古則ト云テ、^(齊)齊下ノ撞
切り古則ニ扣ク也。(1)

代□則ハ快庵派テ入頭ノ首古則之類則ハ吾ガ見地呈引ス、斬猫
□モ引ク、其ノ時ハ斬不斬ガ背触ノ両頭、斬不斬ニ落ヌ処ガ猫
児ノ救フ羊々、亦三喫茶モ引ク、在レドモ趙州ノ道体ガウミ
レバ少シノ差々、亦入門棒入門ノ喝ナドモ一々、入不入ガ背触
ノ両頭々、入不入不渡当行スルガ入門ノ得羊々呈ニ、圭陽和尚
ノ前面ハ嶮岨万仞、□面ハ荆棘林中、作麼生是当鋒ト搦、喫茶
珍重飯堂歇トナサレタモ此ノ筋目也、只茶ヲ吞ンテ飯タ迄ヨ、
亦培芝和尚ノ南山——好看ト出ノ、侍者点茶来ト被成タモ、当
則ヨリノゴ修行テ成トタゾ、急切ナ直下ハ、只茶吞テ飯シ迄

ヨ、是ヲ当鋒底ト云テ走ゾ、当則天嶺和尚ヨリ白庵流伝在テ不出々々、(6オ)6ウ)

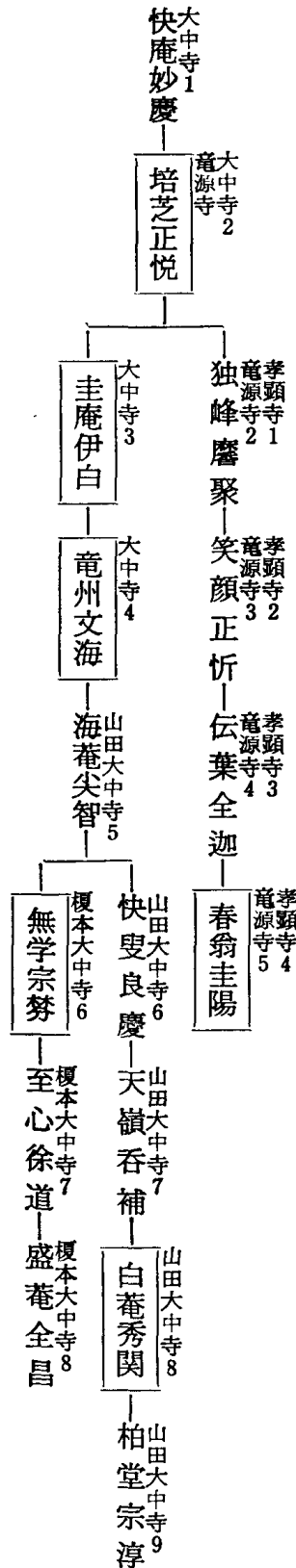
趙州分疎不下 (中略) 培芝和尚竜□寺エ御住ノ時、圭庵モ同船デゴサアツタ、其ノ時大波ガツムトテ芝和尚ノヒザノ上ヲスイツト透タヲ見テ、当則ニ投幾有ルニ呈ニ、此ノ心ヲ受テ奉サレ心ヨリ透レバ、波ガ散ラヌゾ呈ニ、大幾ノ用ガヨワケレバ散ルゾ、トツトツヨイニ仍テ、率度モ散ラヌ細入御塵絶大方ト云モ爰テ用ノヲタゾ、サテ会ガ出タゾ出ヌゾト云ハ、達処ノ□□□□□□ヲ、亦州和尚此ノ句ヲ九月ノ一日出シ、代、天下寛医人、牆

灵々膳上トナサレタゾ(中略)亦圭庵和尚ニ而経ノ時猫児ノ理趣分ノ上ヲ□タヲ見テ、投機ノ雜談ヲ引ニ、(中略)快庵派デ、南岳不汚染、首山弁昆、是則ヲ幾賊ノ又母ト云タゾ、此兩則ノ公安ガ大広ノ柱ダゾ(7オ)8ウ)

趙州布衫 (中略)快庵派デハ此ノ拳処ノ心ノヲカ多イゾ、此羊ナ問意答処ヲバ、ドコデモ如是心得ベシ(10オ)11オ)

無学和尚白庵(31ウ)

次に、右に見られる禅僧名の法系図を掲げると、左のようになる。



これを一見すれば、この門参が大中寺系の快庵派下に伝承されたものであることは明らかであるが、末尾の記載には、歴史的に問題としなければならぬ点がある。まずこの「無学和尚白庵」の句意が不明である。無学は、海菴尖智の法嗣で榎本大中寺六世無学宗努(一五七七)、白庵は山田大中寺八世白菴秀関(一五九九)のことと思われるが、これが門参の伝授を示すとみてよいかどうか問題である。

此ノ外七則ニ□テヲ出スルニ、其ノ時之心得一ニ、(13ウ)という文に続いてあるので、伝授を示す文ともみられるが、無学と白庵は、法系的にもまた歴史的にも極めて微妙な立場に置かれており、これら両者に伝授関係があり得たとは考えられないからである。

快庵妙慶(一四三二)一四九三開山の下野大中寺は、西山田(富田)と榎本(永代)に二箇寺存する。しかも、開山より

二世塔芝正悦(一四四二—一五二四)、三世主庵伊白(一五三八)、四世竜洲文海(一五四一)、五世海庵尖(泉)智(一五五八)までの五代が同一世代という、不思議な現象を呈している。このように奇異な世代になったのは、師弟及び法兄法弟の争いによるものである。⁽³⁾すなわち、大中寺六世快叟良慶(一五七八)は、師の海庵尖智と不仲となり大中寺を出るに至った。兄弟弟子の無学宗旉等がこれを調定しようとしたが、海庵がこれに応ぜず、無学が大中寺の後席を継ぐに至って、無学と快叟の争いに発展した。大中寺の開基であり檀越である小山氏は、はじめ快叟を支持していたが、無学を好遇するようになり、水代郷榎本城の近くに新たに大中寺を建立し、五世海庵まで勸請して外護を加えた。一方、富田郷山田の大中寺は、檀越の外護を失い虚席となり、この間の永禄五年(一五六二)夏には伽藍を焼失して荒廃したが、快叟の法嗣天嶺吞補(一五一六—一五八八)が入院し、籌山居士の外護により旧觀に復した。この富田の大中寺は、後に関三利の一として天下大僧録に補せられることになるが、以上が同開山で五代まで同世代の太平山大中寺が二箇寺併存することになった経緯である。こうした無学派と快叟派の確執を前提するならば、師弟関係もない両師に門参の伝授が果してあり得たかどうかは疑問である。白庵が白庵秀関を指すことは、「当則天嶺和尚ヨリ白庵流传在テ不出々々」(6ウ)という記載があるこ

とからも明らかであり、したがって、この門参が富田大中寺に伝承されたものであることは明白であるが、結城孝顕寺春翁圭陽の参語も含まれており、広く諸師の参語を参酌して見られるので、上記のような確執を越えて、参禅の資料とされていたとも考えられる。しかし、いづれにしても、「無学和尚白庵」の語は、末尾の句としては中途半端であり、意味不明である。

この富田大中寺伝承の快庵派門参の特徴の一つに、対臨濟宗の意識が極めて強いことが指摘できる。たとえば、趙州分疎不下の話⁽⁴⁾について、

師云、至道ノ消息ヲ、扣キ羊至道——扱ト云ハ心信銘也、是ヲ州拳ノ示衆ニ、四至トモニ一位ニ、至ハ大ニト云字意ニ呈ニ、大道ト云心ニ、此ノ至道ト云ニ易難ハナイゾ、唯々揀扱ヲ嫌タゾ、別ノ家デ揀扱ト云ハ智不到、会不会ノコトヨ、爰ヲ儒釈道ノ三家デ沙汰セデハ叶ヌコトダ、鑽之弥堅、仰之弥高シト云モ爰ノコトヨ呈ニ、畢竟至道ト云ハ、六祖ノ道体本来無一物ノコトヨ、此無一物ニ至テハ、趙州モ五季分疎不下タゾ、三世諸仏モ歴代ノ祖師モ不思議不可得ヨ、至道ノ極妙ニ至テ明メバ出ヌ、サテ明メタラバ明白裡ヨ、夫ハ悟上得后ノ漢ヨ呈ニ、雪裡——難弁トアルゾ、此ノ心ヲ以テ趙州雪峰ノ家ノシマリトシタゾ、雪裡ノ粉モ白色白ニ白添エ、墨ニ墨ヲ重タコト云テ雪——粉ガ分リ易ク、墨——弁デハナイゾ、雪トナリ、粉トナリ、墨トナリ、媒トナツタ者ガアル、是ガ難シ弁コトダ、或ハ虚班——難ト

云モ、向心得サシ、亦雪上嚴霜、又一重ト云モ向へ、是ハ濟下デハ雪霜ノ肌エトシテ沙汰□□夏ダ、亦是ヲ如幻ノ体共云タ呈ニ、雪ダゾ、霜ダト云ハ体ハアルゾ、サテ亦手ニ□□腹氣ガ出レバ、トロリトナルゾ、是則至道へ、爰ヲ魔境トモ、未后ノ句トモ云タ、ナゼーバ至道ノ肌ニ仏智祖智ノ沙汰ハナイゾ時魔境ヨ(7オウウ)

とあるように、臨濟下の参話も参考にしているのが知られる。また、他派の門参の引用例は見られないが、「別ノ家」の見解として、揀択を智不到、すなわち三位の第二位とみる参を引用していることから知られるように、他派の門参も大いに参考にしているとみてよい。さらに、趙州布衫⁽⁵⁾の話について、

師云、打中間底夏ヲ代、起挑不上、心ハ、起モ挑モアケアガルトヨム、亦カキアグルトモヨムナリ、粟ダモ米デモ、未ツ一ツニ打籠テクツト煮ツブシテ見サシ、一粒モ上ルマイゾ、ツブガアラバ上ラデハ、齊下デ頭スト云ハ、建立門ニ立テ棒喝ヲ行タヨ、為ニノコヨ、為ニナルガ調羹ノコヨ、クツト煮ツブスト云ハ虚体ノコヨ、中間底ノコヨ、爰ハ棒喝不到ノ地ダ、此虚体ヲ齊下デハ未后ノ句トモ云タ、難々瞞ト云モ向タ、虚位ニ形キハ見エヌソ、亦洞上デハ中間ヲ七種菜羹ト云タ、亦大釜トモ云タ、柳梅——蜩、末一ツニ打籠ノタ時、偏正ノ沙汰ワ無い、到ノ一位トモ云タ、亦無至処トモ云タ、云云(11オウウ)

とあるように、濟下と洞上の参話の比較を行っており、濟下

は建立門すなわち方便門、洞上は「偏正ノ沙汰ワ無い到ノ一位」「無至処」すなわち五位でいえば第五位の兼中到、三位でいえば第三位の那邊に位置付けている。最後の普化鈴鐸⁽⁶⁾の話でも、

此ノ浦ハ花柳ノ誰、六祖通体、法眼宗ノ自己ヨ、見成公案ニ掛テ心得ベシ、洞上デハ偏正一致ノ修行ダ、亦異類ノ知不到へ、異ト云ハ生類ト云ハ偏へ、齊家ノ極則是ニ不^レ過、能々心得モテ、十二時中指不置会義在ラバ、一千七百ノ公案、一毛ヲ太虚ニ収ガ如ク、大虚ヲ一毛ニ収カ如クナル可シ、是ハ大羸生、(13オウウ)

とあり、洞上と濟家の比較をしているが、洞上では三位の第二位である知不到^(智)とするのに対して、「齊家ノ極則是ニ不^レ過」として、その見解を「大羸生」と判断しているように、その悟徹の浅深に明らかに優劣の差異を意識しているのが看取される。

このように、洞上すなわち曹洞宗と、濟下(家)すなわち臨濟宗の室内参禅の内容に極めて深い関心を寄せ、その差異を意識している点は、この門参の有する大きな特色の一であろう。他の曹洞宗関係の門参類では、曹洞宗内における他派の門参を意識することはあるが、対臨濟宗の密参の仕方を意識している例はあまり見出されない。

三

『門徒秘参』には、次に「十則正法眼蔵」として、世尊拈華、迦葉刹竿、武帝達磨、六祖不(落)階級、無情説法、六外一句之話、青女離魂、托鉢下堂、仰山枕子之話、夾山道不会話の、十則の公案に対する参禅の仕方を記した、門参が掲載されている。この十則は、瑩山紹瑾(二二六八—一三二五)の拈提と伝承される『秘密正法眼蔵』によったものであることは明らかであり、これについてはかつて闕説したことがある。^(?)この門参の末尾には、「花叟派」及び「祥雲山竜泰寺本参也」とあり、また竜泰寺九世光山正玄(一五七八)や、同十一世大洞正桃(一六〇五)の代話が引用されていることからも、純粹に竜泰寺伝承の門参とみてよい。

この「十則正法眼蔵」と題する竜泰寺所蔵の門参の特色の第一は、『秘密正法眼蔵』の瑩山紹瑾の拈提を全く前提しない、代語及び参禅の方法を記したものであることであり、第二は、極めて機関に富んだ参禅の仕方が展開されているという点である。次にその全文を掲げておく。

十則正法眼蔵始也

世尊拈華

迦葉刹竿

武帝達磨

六祖不階級

無情説法

六外一句之話

青女離魂
托鉢下堂
仰山枕子之話
夾山道不会話

世尊拈華 師云、拈処ヲ代、学師ノ前ニ至テ童子ナドガ歩ル羊行テカアクリウト挙ス也、心ハ、ニツヤ三ツヤノ子童ニ父ガ鳴ケバ此ノ花クリウト云ワレテ咲舎タ如クタゾ、師云、迦葉ノ微笑ヲ代、当人ノ咲含ム也、師云、句ヲ代、聞ト相合句ト相通ス、是レハ光山扣也、亦一説ハ、世尊迦葉ノ立処ヲ代、実相ハ無相示拈走、師云、迦葉ノ微笑ヲ代、無相コソ実相ヨト微笑ノ走、師云、頌ニ尾巴已露頌タラ□□、代、天上天下——尊ト云尾巴ガ爰デ露テ走、心ハ、尾巴ハ本位也、独尊ト云ハ無相ヨ、無相コソ実相ヨ、亦大洞ハ世尊迦葉ノ立処ヲ代、脱体俱在位裡、師云、位裡デノ対シ羊ヲ代、世尊ハ用処ニ在テ体処ノ迦葉ニ対シ、迦葉ハ体処ニ在テ用処ノ世尊ニ対シ、師云、微笑シ羊ヲ代、指ヲ以テ師ヲ指テ、得道サウナヨ、師云、世尊ノ処ノ畢竟ヲ代、九重密処敵掛由来露ニ妙得、又師云、不立——属ヲ代、極処密処亦何ント作ン、敵掛由来妙伝露、心ハ、敵垢衣ト云ハ仏衣ノ一也、妙伝露向附属シタゾ、

迦葉刹竿 師云、此外別ニ何ニモノヲカ伝ヲ代、左右拳手ノ是レワ仏邊是ハ祖辺、二三度拳ノ阿難ヨツ、師云、伝底ヲ代、阿難ヨツ、亦広額猪児ニ行ク時キハ、キツト喚飯ス、当頭ヲ代、某甲ハ和尚ノ境界ニ住シ、和尚ハ某甲ノ境界ニ住ノ走、師云、恁麼ノ時如何、代、眼中童子目前人、師云、世尊ト広額トキツト見合セタ、当頭ヲ代、世尊ハ広額ガ境界ニ住、広額ハ世尊ノ境界ニ住ノ走、師云、恁麼時如何、代、眼中——人心ハ

世尊広額ニツナイゾ、句モ眼中ノ童子ガ目前ノ人々、ニツナイ
コタゾ、師云、迦——何物伝ヲ代、阿難ヨツ／＼ト低頭ノ
三度ト拳々、師云、句ヲ代、両口一舌、師云、両口一舌ヲ代、
阿難ヨツト拳ス也、永昌寺ノコ也、亦光山和尚拳派ハ前ト一
ツ心、句ハ別心、代、瞎駟不_レ受冥山機、扶起我宗大法幢、心ハ
瞎駟ノ肌エノ時キ正法眼藏也 時キ我宗ノ大法幢也、

武帝達磨 師云、第一儀ヲ代、立身叉手ノ立ツ、師云、句ヲ代、
無影樹下合同船、心ハ第一儀ノ処ハヒヨツトツム立ツタマテ
ヨ、ナントモ云エバ第二儀ヨ、句モ三位ニ用ル則ンバ、洞上デ
ハ、無影樹ト云ハ本位ノコ、下□云ハ中ノコ心、合同船ト云
ハ、三位トモニ欠ヌコ心、爰デハ第一儀、立身叉手、無影樹下
迄ヨ ヒヨツトツ、立ツタ処ニ技葉ハ出ヌゾ、在ルガ合同船ト
云ハ、其ニ□タ物ノガナイゾ、亦大洞ハ、第一儀ヲ代、天子
無ニ父母、師抄云、天子——無イガ、何ントテ第一儀デハアル
ゾ、代、天子無ニ父母トハ云イ走カ、師云、廓然——聖ヲ代、摸
羊ノ天子ライダノ羊ノ廊トシテ忘倚、心ハ是ハ上參也、前ハ天
子無父母トハヤ、位ガ走り沙汰ヲシタゾ、サテ忘倚トハ、天
子ニヨリ付カヌ処タゾ時ガ第一儀ダ、爰ハ至極——抱タ処ノコ
ヨ、又第一儀ヲ代、天子デ走、師云、ナントテ天子ガ第一儀デ
ハアルゾ代、天子無父母トハ云イ走ヌ、末モ一ツ心、師云、廓
然——識ヲ、代、天子ヲ抱ク振舞トノ忘倚、依ハ是モ義心、紫
極——抱ト云、心一ツ心、

六祖不階級 師云、不——級ヲ代、師ノ前ニ至テニツコト笑含
ム也、恁麼時如何、代、丹鳳啣玄珠栖暹玉樹、亦不——級ヲ
代、不汚染デ走、師云、恁麼時如何、代、説似一物即不中、嫌

路ワ何ント云モソレハ階級ダゾ、功作短練ヲ経ルゾ、ソレハ修
行シ諸解学得ノ間タゾ、畢竟不階級ト云ハ一心一物ノコヨ、此
ノ心ニ階級ノ仏法ハナイゾ呈ニ、丹鳳ト云モ至鳥ノコヨ、心鳥
ノコヨ、六祖一生涯ハ不汚染テ建立シタ家タゾ、此主ハ説似ス
レバ即不_レ中タゾ、類則ハ世尊拈花、迦葉刹竿、道吾女人拜、
洞山無静說法 師云、無——法ヲ代、露柱ハ露柱ト説キ、灯
ハ灯ト説キ、柳ハ緑リト説キ、花ハ紅イト説デ走、師云、
句ヲ溪声広長舌、山色清浄心、心ハ、三寸ノ舌頭ヲ以テ説イタ
ラバ其レハ臭フヨ、先聖ヨリノ舌先キヨ、鷲ハ白ク鳥ハ黒イ
ゾ、爰ハ達磨不識二祖モ不可得ダ、大洞ハ無情說法ヲ代、灯籠
ハ灯籠ト語テ出デ、露柱ハ露柱ト語テ出テ走、師云、恁麼時如
何、代、眼処テ声聞キ、耳処テ分_レ色テ走、心ハ能クサエ本位
ニ至レバ眼処テ声ヲ聞キ耳処テ色ヲモ分タデハ、師云、畢竟ヲ
代、本無相中_{ヨリ}生見終日語話シタガ別ノ物デハ走ヌ、亦無情説
法ヲ代、師ノ前ニ至テ倒臥ノ鼻声カウ／＼、師云、句ヲ代、風
吹_レ石的_ニ会_ニ摩訶_ニ、亦無——法シ羊ヲ代、心説ハ不説真聞ハ不
聞デ走、師云、畢竟ヲ代、師ノ前ニ至テ珠数テモナンデモチヤ
ツト耳ニ盖ウ也、心ハ、ツムツケテ聞タガ聞キニ落ヌゾ時本位
居タゾ、

白馬六外句 語底黙底、不語底不黙底、惣是惣不是ト、クツト
嫌イ落サレテ、学師ノ前ニ至テ礼三拜ノ、恩大ニ難_レ酬、心ハ語
黙背触共ニクツト嫌イツメラレテ向ゾトカクツト当_レ的スル処
デ、万劫ニモ難_レ酬恩ヲ、バ知ツタコヨ、亦一説ハ、此ノ恩父母ニ
越タリ、師抄云、恩ト持タラバ万劫ノ繫駟撼ヨ、代、学師ノ膝
ヲト云テ、和尚モ繫駟撼、某甲モ繫駟撼ヨ、心ハヨリツナガ

ルレバ其ヲモケタゾ、師云、六外ヲ代、学師ノ前ニ至テ標然ト立テ、坐具ナドヲホックトリ落シテ、揺風架頭巾ト挙ス也、師云、句ヲ代、所作皆以弁既知到涅槃、心ハ、語底黙底、不語底不黙底、惚、是六外ト云ハ語黙動靜ノ外タゾト嫌ワレテ、案山子カ幽冥ナドノ羊ニ標然ト立ツタ処ハ架頭巾斗タゾ呈ニ、句モ皆ナ六外ノ間ハ所作ノ間ダ外カ到涅槃ダ、同香巖樹上ガ類則也、師云、人樹——作麼生対ト云タル幾ヲ代、学師ノ前ニタヨト至テ、坐具デモ珠数デモ瓶風ニナリトモ何ニナリトモ掛テ拳、亦ナドナゲホックト凡落ス也、心ハ、只一ケノ坐具ニ殺シナサウ為タゾ、此ノ時ヨリ対シスマシタゾ、師云、句ヲ代、揺風架頭巾、師云、樹上頭ハ通易、樹下頭ハ道難シヲ代、樹上頭ハ道ニ依テ易ク、樹下頭ハ通シニ依テ難イゾ、師云、巖阿々大笑ヲ代、未語先分付赤身人、心ハ、齊下デハ接シツムル処ニ在ル相続ダ、阿々大笑ガ赤身ノ人ダゾ、亦畢竟ヲ代、未語——赤身人、心ハ、アノ境界ヲナレトト云タモ、サデハ無イゾ、只タニツヤ三ツノ童子ノスジモナク云タカコク叶タゾ、是ハ出身ノ路也、虎頭上坐ノ処ハ脱体ノ道也、古老ノ香巖樹上ノ代、踏雪破華鞋、掛梅花ニ在枝ナサレタ一句也
倩女離魂 師云、那ケ是真底ヲ代、那ケモ是真底デ走、心ハ、那ケ——底ト見タ時キドツコモ本位デ柱ヘタゾ、此人ナラサル処ハ無イゾ、師云、句ヲ代、百億分身処々身、心ハ百億ニ化身シタガ此ノ一人ト見レバ、処々ニ分身シタゾ、其ノ分身シ羊ハナント、柳緑リ花紅イ、桃紅李白、向分身シタゾ、亦無ニ々々無分別無斷故、向モ拳へ、亦四十八則ノ時キハ青女離魂シ羊ヲ代、師ノ前ニ至テ物ヲ書ク模羊ヲスル也、句ヲ代、心随万境

轉、々処実能幽へ、トツコモ処ノ真底ノ主人デ柱ヘタゾ、此ノ心ハ万境ニ転ジタゾ、在レドモ是カト凡テ出サヌ時キガ幽デ居タゾ呈ニ、三界無法亦瑞聞大悟モ向也、那ケ是不——底ト見タ時、ドツコモ一片ノ聞デ柱ヘタゾ、兩女ガ一女ニ合シタモ向也、
徳山托鉢下堂 師云、托鉢ノ堂ノ下リ羊ヲ代、師ノ前ニ至テ、何ニトノウトツクト坐シテハヤ時キガ出テキタヨナト拳スへ、心ハ、正法眼道体淵底也、師云、畢竟ヲ代、師ノ前ニ至テ只タ飯ルへ、畢竟ト云ニハ無イゾ、至道ノ消息也、任運ノ消息也、通処ノ也、亦閑遊、閑ハ便チ坐シ遊ハ行テ坐シタ消息也、亦独則ニ長イ在可、是ハツタケ物也、
仰山枕子話 師云、枕子推出シ羊ヲ亦問答一般ニトモ、代、師ノ前ニナニト無ク至テ低頭ノイビキラカク摸羊ヲスル也、師云句ヲ代、頭院不_レ知、心ハ、此ノ拳派ハ当人也、師云、一説ハ拳派ハ一ツ也、句ヲ代、殺人刀一毫モ不_レ破、活人劍一毛不_レ損、心ハ、悪クスレバ巖処ノ劔光劔幾ニナルゾ、亦サビメニナルゾ、此ノ古則ニ泰叟ノ鼻ヲチントカンデ、千手千眼不_レ審ト云抑タモ向也、畢竟悟上ノ出逢也、枕子ヲ推出シタヲバナント見ウズゾ、胡廬ガ手ヲ展タト見ウ迄ヨ、亦睡入テソツト驚時分ウント云テ、枕子ヲ推出スル振舞ナス也
夾山道不会話ヲ代、師ノ前ニナドノウ至テ、キツト撻眼ノ、日ノカツトノメチヤツト指句タ羊ニ摸羊ヲスル也、心ハ、大陽目ニ溢レテ万里ニ片雲不_レ掛シテ辺際ノ見エヌト時ガ道ノ倒底也、清浄水魚自迷魚ト云ハ、心魚ノ也、悪クスレバ迷ウズゾ、道倒底ノ時、心魚ヲ収タ_レダゾ、師云句ヲ代、無心体_レ得

無心道、体得無心道亦休、心ハ無心ヲモカク休シタ時道淵底也、亦円通寺デハ挙派一ツへ、師撈ヲ下ス、触目不会ノ道ヲ云エ、代、運足焉、知路、挙スへ、類則ニ明眼人落井ト云モ向也、是ハ十則正法眼藏之終也

花叟派

祥雲山龍泰寺本参也、(14オ)20オ)

このような、瑩山の編集した十則の公案集に対する各派の門参が存したらしいことは、肥前佐賀県円応寺所蔵の抄物資料の中にある『十則正法眼并抄』に、瑩山の拈提である『秘密正法眼藏』に後続して、やはり同じ十則の抄が付されており、さらにこの抄には、白井門派、すなわち上野双林寺一州正伊(一四一六一—一四八七)の系統のものや、大源派の参語も引用されていることから明らかである。そして、瑩山や峨山韶碩、通幻寂霊の語の引用もあるが、了庵派の参の引用例が最も多いことが特徴的である。次に、円応寺所蔵の『十則正法眼并抄』の中の了庵派の参語の引用例を到底してみ

〔世尊拈華〕

又撈云、喚甚麼為正法眼——法門ハ展開両手ニ云、十ヶ指頭八ヶ穴、(中略)又了庵派、十ヶ指頭八ヶ穴□ハ用也、八ヶ穴ナヲ正法眼藏涅槃——法門ト、穴ナヲカズヘアワスルナリ、(6

美濃国竜泰寺所蔵の門参資料について(下)(石川)

オ)

〔迦葉利竿〕

又、瞎駢□□^{不受}冥山機、扶起吾宗大法幢、了庵派ハ句ヲ付ルへ、(6ウ)

〔武帝達磨〕

了庵派ニハ、誰不識ヲ主中主用へ、白井門派ニハ、笑入芳塵爛漫□用へ、(7オ)

〔六祖不階級〕

又投子青頌、無見^{イタケキツアラハ}頂露、雲急劫外春、靈枝不帶春、那辺不坐^{ニモ}空王殿、争肯^{カアエテギツテ}松、田向日輪、是此主那辺ニモ不坐、又何日輪天子位ニモ不坐、ドコホドデカアルラント不犯^{ニル}飯也、了庵派如^レ斯用へ、吾宗那辺透過有^ニ出身路^ニ処へ、(7ウ)

〔無情説法〕

又了庵派ニハ、虚空説法何用^レ口、森羅万象尽説法、大悟シ用ハ、千聖無^ニ解会^ト大悟、(8オ)

〔六外一句之話〕

又放身捨命正此時^ト了庵派用へ(8オ)

〔倩女離魂〕

又両手展開云、左右逢源、了庵派、両手展開^ハ空用^ハ処、両手共空^ニホトニ、左右逢源へ(8ウ)

瑩山の十則の公案集に対する抄、門参の類は、管見に入つたものでは、竜泰寺所蔵の『門徒秘参』の中の「十則正法眼藏」、及び円応寺所蔵の『十則正法眼并抄』の二本のみであ

る。そして、『十則正法眼并抄』で了庵派の参語とされるもので、『門徒秘参』と合致するのは、迦葉利竿の話の「瞎駢不受君山機、扶起我宗大法幢」の句だけであり、他については明確な対応関係は指摘できない。したがって、『十則正法眼并抄』が引用する参語の了庵派が、竜泰寺系の華叟派を指しているとは断定はできない。ただ、第一則から第七則まですべてに了庵派の参語が引用されていることは、了庵派の『十則正法眼蔵』に対する参語がありこれを前提しているとも見て間違いないであろう。そして、了庵派の中で最大門派を形成した月江下の一州派は、白井門派としてその参語が引用されており、他に了庵派としては、了庵慧明(二二三七―一四二一)の法嗣大綱明宗(一四三七)の大綱派か、月江下の華叟派、同じく月江下の泰叟派の三者のいずれかになると思われるが、これをどれと確定することはできない。可能性としては、内容的な検討を通してみる方法であろう。たとえば武帝達磨の話の、「了庵派ニハ、誰、不識ヲ主中主ニ用ク」という語は、了庵派の参語の直接の引用ではなく、その参じ方を記したとみてよいが、『門徒秘参』の「師云、ナントテ天子が第一儀デハアルゾ、代、天子無父母トハ云イ走ヌ、末モ一ツク、師云、廓(然無聖、帝云、对、朕者誰、大師云、不)識ヲ、代、天子ヲ抱ク振舞トノ忘レ倚、依ハ是モ義ク、紫極(宮中鳥)抱(卵)⁸⁾ト云、心一ツク」という参語と、内容的には

決して矛盾しない。天子という第一義諦を抱いた様子は、臨済の四賓主でいえば、もはや賓の立ち入る余地のない、主中主(主看主)の世界とみてよい。しかし、いずれにしてもその対応関係をすべて解決することは困難であり、むしろ、円応寺所蔵の『十則正法眼并抄』に引いた了庵派の参と同様の系統をもつのが、竜泰寺所蔵の『門徒秘参』の中の「十則正法眼蔵」であると理解しておいた方が無難であろう。

四

『門徒秘参』の内容の第三は、「祥雲山龍泰禅寺句参透り」の標題を持つ代語集である。句参透りの題からもわかるように、ある禅語に対する代語を集めたものであり、末尾に「以上三百哉」とあるが、重複するものも合わせて実際には二六七種の句に対する代語集である。次に出句を一覧にして掲げておく。

満眼青山無寸樹・破有法王・出現世間・八識田中下ニ一刀・
現成公案区情三十棒・青天猶喫棒・分明紙上張公子・空手把
鋤頭・步行騎水中・到江呉地尽隔岸越山多時節・頭載午夜
月脚踏黄金地・観音為師教宝冠戴施随・虎口裡ノ活雀兒・石厭
草斜出岸懸花倒生・十二处忘閑影響三千界放浄光明・梧杖頭上
挑日月・芦花裡ノ棒・江月照——所為ゾ・楊子口頭楊柳春楊
花笑殺渡頭人・去来不以形動静不以心・大用——軌則・得銀山

鉄壁不得銀山鉄壁・無根樹解殺能挑海底灯・体得那辺這裡行履
・一色転処還同ニ一色一・老枝——得心時・菊垂金秋露石戴古車
轍・芭蕉如^レ堅^{カクニ}焦穀如^レ芋^{ケノ}・青山元不動・白雲自去来・崑崙ノ
定・祖師未西来少林有妙訣・手把花頭杖・前三々後三々ト云々
ル文殊ノ機・十二時法尔禅迷逢^ニ達磨^一・從生死老只是這ケ・一
有多種ニ無両般・如淨隔——像・把^ニ断^ヲ要津^ニ不通^ニ凡聖^一・纔
有是非泐然失心・十方智者・澄源湛水・古仏堂前猶乘^ニ車子^一・
不醉為客・皆子実相不相違背・以字不成八字不是・一牛吞水五
馬不嘶・内見外見内外空仏・珊瑚枝々撐著月・一種平懷泯然自
尽・枯枝頭上雪大陽不待春・大湖三万六千頃月在彼心説向誰・
雪覆^ニ芦花^一・不^レ施^ニ橈頭^ヲ・船底脱往来終不^レ借^ニ布囊^一・元是一精
明分成六和合・眼見黄葉落耳聞孤雁啼・尽十方絲毫未^レ举揚^一・吸^ニ
尽^ニ玄微^一根鉢同明・九陌紅塵烏帽底五湖春水白鷗前^ニ浩々^一ル紅塵
頭々は故人・月落星暗・深入禅定見十方仏・去日顔如玉飯時鬢似
雪・本有^ニ円成^一如来還同^ニ迷倒^一衆生^一・多子塔前分羊座・白鷺下田千
点雪・報恩者多負恩少・徧正一^ニ齊行^一・玉輪機轉・三世諸仏口掛壁
上猶——大笑・苦樂逆順道有^ニ其中^一・鐘楼上念——菜・是色明心
随处自在・的日榮生地鋪錦・嬰兒・古澗寒泉湧青松雪後凋・滅度
不滅度・応無所住而生其心・赤肉団上壁立万仞・手把^ニ寒天^一扇^一
身着^ニ五月衫^一・樹々^ハ松青^ク足躑^ハ紅^ク・仏法大有只是牙痛・遊人
不入普門境・我愛韶陽新定機一生為人拔釘拔擻・尽十方只是十
方・瞿曇眼——一枝・万瓶不——飢人・亦如何是和尚家風・須
弥頂上・不借^ニ春風^一花自開・的々^ハ當陽^ハ句明^ハ箭後路^ハ・石女喚
回三界夢木人坐断^ニ六門^一機・路逢死蛇須打殺無底藍子盛^ニ将飯^一・病
即消滅不老不死・從縁者始——長堅・我見灯——如斯・眼若不

眠諸夢自除・黑豹——白——騎・法々住自住・心随万境転——
幽・三界無亦猶如火宅・所作皆以——槃・笠重——雪・不^レ招^ニ
無間業^一莫^レ謗^ニ如来^一正法輪^一・風定^ハ花猶落^一・三脚蝦蟇飛過梵天・將
謂青山常運步白石夜生兒・室内紅塵誰^レ払^一・夜月輝肝胆・四ヶ死人・
離四句絶百非・百姓日用不知・月両ヶ・涅槃後有大人相・能為^ニ
万像主^一・四時遂不凋・太平元是將運致・誰知潭底自元屋頭有天・
自性・非思量・好ヶ^レ仏殿無仏・快哉纖毫^ニ不^レ費^一・力万里家鄉通咫
天・不持捨不覺忘・頭々^ハ劍刃^ハ上^一・欲識誕生王子父鶴出銀籠冲□
漢^一・一^ニ灵皮袋^一々々^ハ一^ニ灵^一・尽大地你方自己・仏界魔界・魔尼珠・
親^レ収如来^一蔵裡・拶倒空王殿却——光・未跨船舷好与三十棒・世
尊棺外伸^ニ両脚^一・觀音妙——苦・一種沒絃琴・木舟虚々通自由・觀
音入^ニ流忘^一所智^一・古路雪深覆高山雲更遮・只有照壁——風・荆
棘林中生優鉢華・倒騎仏殿・江南野水——中——我・直指人身
——仏・多福一双竹・病即消滅不老不死・張公吞酒李公醉・霜
眉雪鬢・不依天雨——顔・芥子納須弥易・大虚掛針難・心身徧
歡喜・応物現形如水中月・十二面觀音那ヶ是正面・機越^ニ仏祖^一・
道飯^ハ初心^一・□急水——知・心外無法・月明月不知秋・没量^レ大
人・拳一明三・白珪無瑕・衆盲探——端——全像・一殿不^レ問^ニ
建立^一如何是真仏土蔵・玄功路絶処暗中不死人・是色頭々也弥
勒聞声也処々^ハ觀音^ハ・峰頭自有威音——不消・無功妙旨不涉玄微
・虎斑見易・趙州東壁掛蒲芦・還丹——金・滿城花柳風外淡
雷・少年一段風流豔・万里無寸草・如意現・白馬入芦花・摩尼
宝殿有^ニ四角^一三角蔵一角常顯・錦桜——地・黄河三凍鎖・古澗
・掬水・沖無形々々時如何・語尽山雲海月情・千兵易得一將誰

求・白頭子就黒頭父・象角雖多一麟足・誰知遠烟浪別有好思量
 ・大湖三万六千頃・水中臨味——青・夫子不知字達磨不_レ會_レ
 禪・長慶云撞著道伴——哀畢・居一切不起忘念・安住不退・超
 宗越格・宿鷺亭——花・芻句吼時天地合木鷄啼後祖灯輝・本色
 住——痕・月夜断井索時人喚作蛇・今日看来火裡氷・芦花無異
 色白鳥下此淵・無中有路出塵埃・古木竜吟・不_レ触_レ夏而知_レ
 对_レ縁而照_レ・世尊有密語・法至法中久修梵行・本来面目無生死
 ——凶・特中生_レ兒・獅子翻躍・紫羅帳合凶臣不通・客散雲樓
 酒碗乱・泥牛耕破瑠璃地・雪雲粉分易・長鯨飲尽滄溟水・業識忙
 々那伽大定・玉兔懷胎入紫微・仏未出世大法輪轉・对境心——
 起・退得那辺這裏行履・鷓鴣啼在深花裡・玉鳥吞乱明月泉・中
 有黄金一國充・深因——到・半夜憫_レ一一曲吟・頭々劔刃上・
 触縁对境如用吹毛・不_レ触_レ夏而知_レ对縁照・我心似秋月・月潭
 底_レ穿水無痕・大千沙界現全身・玉簾深——不露・暗中驚破玉人眠
 ・鶴出——漢・雲散_レ長空_レ後虚堂夜月円・四方八面玉玲瓏・竜
 女成仏・知音亞——外・身上如_レ堅・大錯・迷洞不_レ拘堂奥人・
 夜舩撓_レ転瑠璃地・応無所——其心・若是坐禅底衲僧_{ナラバ}風塵
 草動自閑得出・截_レ断仏祖_レ・寒岩枯木・四睡——心・三十年来
 未曾——辛昔・蒼龍下窟・光境俱忘・寒岩異草・坐見白雲宗不
 妙・九年人不知幾度——過・本来——真・衲僧ノ地獄・衲僧ノ
 田地・黒牛臥水時如何・天童覚_レ玄葵花——風・刀杖未_レ不_レ举_レ弘
 袖去猶是従前圈_レ裡如何免此窟・巍々実相——被懷・居於_レ転_レ処
 ・一度功涉

ここに提起された出句は、いずれもよく知られた禅語であ
 り、その出典は、『碧巖録』や『大慧語録』『宏智録』『証道
 歌』『臨濟録』等の語録類及び『法華経方便品』『同観世音菩
 薩普門品』等の經典から引用されたもので、断片的な語句が
 極めて雑然と集められているといつてよい。また、自性・非
 思量・摩尼珠・古澗のような、極めて一般的な熟語もある
 が、瑩山紹瑾が峨山韶碩に課したとされる「月両箇」の公案
 や、道元の叡山修学中の疑团とされる「本来本性、天然自
 性真」の語句も使用されており、中国のみではなく、日本の
 祖師の行履も参禅の手段として用いられていたことを物語
 る。

「祥雲山竜泰禅寺句参透り」は、すでに述べたように、形
 式的には代語集である。しかし、他の代語集と異なる点は、
 たとえば、

○八識田中下ニ一刀ヲ代、一色明辺ヲマツ十分ト持テ走、師
 云、一刀ノ下シ羊ヲ代、極ムレバ変ノ走、又云、八識田中ヲ、
 代、学師ヲ躍ケノケテナル也、師云、一刀ノ下シ羊ヲ、代、
 駕_レ瓦上——夢裡驚(21オ)

とあるように、師家と学人の一対一の場における入室参禅の
 方法を記したものであり、右に掲げた一句一語が、すべて独
 立の古則としての扱いを受けていることが知られる。一般に
 代語は、公開の場における参学の方法で、その記録は江戸時

代になると上梓公刊されるようになる。⁽⁹⁾しかし『祥雲山竜泰
禅寺句参透り』は、形式としては代語集であるが、内容的に
は門参として扱われていたとみてよいであろう。

この「祥雲山竜泰禅寺句参透り」までが、すでに述べたよ
うに、慶長十一年八月十一日までの書写であり、中巖文的の
室内点検がなされ、嗣法が許されようとしていた時期と考え
られる。

次に、「汾陽十八問」の抄が書写収録されているが、た
とえば、

請益問

僧問馬祖——裡底、私、請益門トハ本ト知タル衰ノ不審ナルコ
ヲ問テ知ヲモ云、亦日々新ヲ習ヲモ云、殿裡底ナラバ仏ハ巍然
ヨ

亦吾宗請益ト云ハ、随分説得シタ上ニマダ一手之道理ガアルラ
ウト知識ニ益ヲ請ウ義也、下々ノ学者ノ置処ノ一問ニアラズ
僧問馬——即心即仏、誰レガ自心是仏会セヌ者ノガアラウゾ、
呪ヤ此僧、会シスマンテ於テ請益ダゾ、祖モ僧ノ問処ヲ証得ノ
弁ノゾ、即心コソ即仏ヨ、趙州云、殿裡底、此僧モ向レ他何ノ用
所ゾ、云、只自可怡悦——君有ニ機宜ニ請益シタゾ、趙州ハ你
ハ仏ヲ問カ仏ノコナラバ殿裡ニ有ワ一重上ヲ益タゾ(41才)

とあるように、前の三種がいずれも、竜泰寺系快庵派や華叟
派の門参であるのに対して、むしろ語録抄、聞き書き抄とみ
た方がよいであろう。汾陽十八問は、宋代の汾陽善昭(九四

七(一〇二四)が、師家と学人の問話を、内容によって十八種
に分類した、機関の一種であり、『門徒秘参』に収録された
抄のテキストは『人天眼目』であったと思われる。ただし、
これが誰の抄であるかはこれを示す記載がないので全く不明
である。「私云」「注云」のような記載があるので、聞き書き
そのままのものではなく、後人の手が加ったものであること
は明らかである。竜泰寺には、中世末か近世初めの頃の書写
と思われる『人天眼目』の抄が一本存するが、これとの対応
もみられない。

『門徒秘参』の最後には、「峨山和尚嗣法之次第」として、
無底長老以下二十二人の人名が列記され、さらに「伝戒之人
数三人、合廿五人」とあり、いわゆる峨山の二十五哲に関す
る記載がある。これが末尾に付された理由が不明であるが、
これに続けて、同筆で、「岢慶長十二白_末小春吉辰」の記載が
あり、この年記は、本誌前号で問題とした『宗門之一大事因
縁』の年記と同じであり、したがって、この門参の成立と全
く無関係な記録とは考えられない。恐らく、門参の伝授と時
を同じくしてなされたと思われる。入室嗣法の問題と関連し
ているとみられるが、今はこの指摘のみに止めておく。

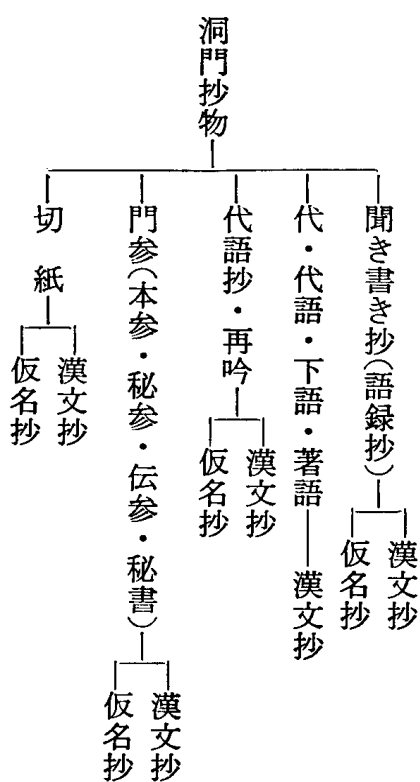
五

以上、三回に亘って竜泰寺に所蔵される四種の門参資料に

ついで考察を加えてきたが、中世禅宗史研究、中世曹洞宗史の研究に、抄物資料が果す役割の重要性を改めて痛感させられた。三回の論稿では、いずれもその形式的、形体的な考察しかできなかったが、種々の洞門抄物資料の中でも、門参資料は、入室参禅が問題であるだけに、安易に論ずることはできなかった。江戸時代に続々公刊される代語抄や再吟とともに、その内容的な考察は今後の課題としておきたい。また、入室嗣法の問題と関連して、切紙資料についても問題としなければならないが、切紙資料は民俗学的にも極めて貴重な文献であり、これについても今後の研究課題としておきたい。

註

(1) 洞門抄物資料と通称される文献群には極めて種々雑多なものが含まれる。これをいかに分類するかは今後に残された課題であるが、次に一試論を掲げておく。



詳しくは拙稿「中世禅宗史研究と禅籍抄物資料」(『飯田利行博士古稀記念東洋学論叢』所収。昭和五十六年一月、国書刊行会刊)

(2) 『祥雲山竜泰禅寺門徒秘参』については、金田弘「洞門抄物類書目解題・統稿」(『国学院雑誌』七十八卷十一号、昭和五十二年十一月十五日)に紹介されている。

(3) 拙著『美濃国祥雲山竜泰寺史』(昭和五十五年十一月、竜泰寺蔵版)六七頁、一七〇頁。『禅宗地方史調査会年報』第二集(昭和五十五年十月)大中寺の項参照。

(4) 『碧巖録』第五十八則の話頭。「僧問趙州、至道無難唯嫌揀扱、是時人窠窟否、州云、曾有人問我、直得五年分疎不下」(大正蔵四八、一九一頁b)

(5) 趙州七斤布衫、あるいは趙州万法婦一とも呼ばれる。『碧巖録』第四十五則の話頭。「僧問趙州、万法婦一、一婦何処、州云、我在青州、作一領衫、重七斤」(大正蔵四、一八一頁八b)

(6) 『臨濟録』勘弁に「因普化常於街市揺鈴云、明頭来明頭打、暗頭来暗頭打、四方八面来旋風打、虚空来連架打、師令侍者去纒見如是道便把住云、総不与麼来时如何、普化托開云、来日大悲院裏有斎、侍者回拳似師、師云、我從來疑著這漢」(大正蔵四七、五〇三頁b)とある話。普化振鈴、普化揺鈴の話ともいう。

(7) 拙稿「『秘密正法眼蔵』再考」(『宗学研究』二十二号、昭和五十四年三月)参照。

(8) 「紫極宮中鳥抱卵」は、『宏智録』卷五の「天童小参録」の句で、「小参云、一段光明亘古今、有無照破脱情塵、当頭触

著弥天過、退歩承当特地新、紫極宮中烏抱卵、銀河浪裏兎推輪、是須妙手携来用、百億分身処処真、云云」(大正蔵四八、七二頁c)とある。この句は宏智の前八句と呼ばれ、古来日本曹洞宗においてしばしば著語が附され伝承された。明峰素哲や峨山韶碩の著語とされるものも伝承されている。拙稿「肥前円応寺所蔵『大庵和尚下語』について」(『宗学研究』二十三号、昭和五十五年三月)参照。

(9) 代語にさらに注釈を加えたものが代語抄・再吟であり、公刊された主なものには、永平寺高国英峻(一六七四)の『高国代抄』、総寧寺巨海良達(一五九九)の『巨海代抄』、同じく総寧寺大淵文利(一六三六)の『大淵代抄』、『大淵和尚再吟』、泉岳寺鉄外吞鷲(一五九二)、『鉄外和尚代抄』、『鉄外和尚再吟』、孝顕寺扶桑大暉(一六四五)の『扶桑再吟』等がある。これらはいずれも、駒沢大学文学部国文学研究室編、『禅門抄物叢刊』(汲古書院刊)に解題が付され影印収録されている。

(昭和五十五年度駒沢大学特別研究助成金個人研究による研究成果の一部)